

日韓大学生・大学院生学術文化交流研修プログラム

——企画・実施とその成果

阿部 泰 郎 ・ 安 井 永 子

名古屋大学文学研究科

阿部：このFD研修でわれわれの活動を紹介できるということは、大変光栄なことと存じております。皆さんにお渡ししてある資料は、一番基本的な交流研修のショートステイ、ショートビジットのプログラムと、この企画の土台となった文科省の留学生交流支援制度の申請書のコピーです。加えて、その結果として、この研修の課程の中で、参加した双方の学生、院生たちがどんな成果を上げたかということについてのペーパーです。これは将来的には、まとめて論文集のようなものにして、それを韓国にもお送りしたいと思っております。その土台となる原稿が既に出来ておりますので、これを皆さんにお目に掛けたいと思って持ってまいりました。

それでは、これから順を追って、安井さんと私と2人で取り組みました、この日韓大学生・大学院生学術文化交流研修プログラムの企画と実施の経緯をお話して、結果としてどんな成果が上がったのかということをお話しします。また、その中でさまざまな問題点や課題が出てきましたし、今後に向けて新たに組み込んでいくための希望も可能性も見出されました。そういうことを2人で皆さんにご紹介しつつ、お話ししたいと思います。前半の経緯が結構長いのですが、それは私のほうでしゃべらせていただいて、実施に当たっては、特に木浦のほうへ安井さんが一緒に行って院生と最後まで過ごして帰ってきてくれましたので、そちらの報告を、それからこれからの可能性についても安井さんにお話をさせていただきたいと思っております。では、前半のところをお話させていただきます。

国立木浦大学校との学術・教育面での交流の歴史

皆さんもご承知のように、木浦大学校と文学研究科との交流は、全学交流というレベルにまで至る以前の歴史も含めて、極めて長い歴史をもっております。これは、90年代に考古学の渡邊先生による交流から始まって、それを林学部長が更に発展させて、学部間で

の交流を行おうということになったのが、私が赴任したのは94年ですけれども、その翌年、95年だと思います。この中でもご一緒された方がおられると思いますけれども、木浦大学校で名古屋大学と木浦大学校との大規模な学術交流のシンポジウムが催されました。私もそこに一緒に参加しまして、ちょうどそのときに学部長からコーディネーターを勤めると仰せつかりました。それ以来、木浦大学校との交流のためのコーディネートを務めさせていただいております。木浦大学校から日本語研修として毎年研修団が派遣されるのは、それ以前から行われており、私が来たころにはもう始まっていました。これは初めの3年間は助成がありまして、非常に恵まれたものだったようですけれども、旅費から滞在費まで、基本的にすべて賄えました。そういう助成の下で、日本語研修団が派遣されて、それを学部が受け入れるというかたちで行われておりました。その助成が付いたのは3年間だけで、それ以降はそういうプランがありませんでした。ぜひ助成は欲しいものだと思っいろいろ模索しましたが、結局は木浦大学の自費研修ということになって、その派遣をこちらで受け入れるというかたちになりました。ただ、そのファンデーションとしては、留学生センターで短期の日本語講座が行われていたことが実に助かりました。これに乗かって無料で日本語講習が受けられるということで、木浦大学としても、宿泊費や旅費も自前で負担しても、学生たちに十分メリットがあり、何とか維持できたのです。

それからもう一つは、文学部のほうの受け入れ態勢も確立されておりました。そういう経緯で始まったということもありまして、たぶん、最初のときからだったと思いますけれども、教員とか有志のボランティアの方がショートビジットというかたちで自宅に韓国の学生たちを受け入れて、彼らは期間中ずっと大学の中の宿舎にいたわけですが、何泊かは民間の、大概が教員の家庭だったのですけれども、そこへ受け入れていただき、いろいろな生活経験をさせるという企画も実施しておりました。それは私も受け継いで、10年以上、

毎回この時期になると、教授会で皆さんに「ボランティアでのショートビジットの受け入れをお願いします」とご依頼を申し上げて、いろいろとやりくりして全員にビジットを経験させる。私個人でもこれについてはいろいろな思い出があります。そんな活動をあれこれとくりかえしながら、とにもかくにも続いていたわけです。

その間に、木浦大学と名古屋大学との学部間交流という次元から、だんだん発展して、全学交流というステージになりました。年代は、私も正確には覚えていないのですが、2年前に全学交流が5年の節目を迎えて更新しまして、また新しく全学交流が再締結されております。こうして徐々にステージを上げていく間に、文学部の創立50周年記念のシンポジウム、あるいは国際交流の学会などが節目には催され、また木浦大学でも大規模な学術研究集会などを行って、それらの積み重ねのうえで相互に交流が深まっていったのです。

国立木浦大学校との交流：課題と問題点

ただし、それは決して右肩上がりですっと発展していったというわけではありません。結構苦い思い出というか、本当にいろいろなことがありました。一番大変な問題は、松尾総長のときに、AC21という全学的な国際連携の組織を立ち上げて、その発足の国際会議に、木浦大学は総長も自ら来日し、最初の創立メンバーに加わりました。私も式典と一緒に参加して、木浦大学がこういう機会に加わって、単なる全学交流とい

う以上に、大きなステージと一緒に行動してくれれば、これからも大変頼もしいと思っていたわけですが、これは、実は3年しか続きませんでした。私も全く知らなかったし、そのときの町田研究科長も含めて当時われわれは木浦大学を訪問して研究集会を開きました。総長とも会って、それで「これから一緒にさらに交流を発展させましょう」という合意をしていたのですが、その直後、脱退してしまったんです。これは、たぶん木浦大学内部のいろいろな事情があったのでしょうか。どうして脱退に至ったかその理由は今でもよく分かりません。その当時、AC21の国際交流担当の理事から呼ばれて行ったら、脱退の書類を見せられて、私は愕然としたことでした。意思の疎通の難しさというか、お互いの行き違いなんですからけれども、毎年、日常的にずっと交流し、研修団の受け入れとか、実績を積み上げていても、われわれのあずかり知らないところで交流の足元をすくわれるようなことも起こるのだ、と非常に教訓になったことです。そういうことがあっても、とにかく全学交流協定が再締結されて、再びそれがさらに継続されて展開できるということになったわけですし、研修団の派遣についても、木浦大学のほうで何とか自費でやろうと継続しております。

もう一つ大きな問題は、留学生センターでの短期の日本語講座が廃止されたことです。そこに乗っかって、その時期に合わせて毎年夏に受け入れていたわけですが、それができなくなったということです。われわれとしては、こちらのほうが痛手でした。木浦大学がほとんどの費用を負担して、滞在費も自分たちで持



ってやる、われわれはそのお世話をしていればいいというかたちでうまくやっていたそのバランスが崩れてしまったわけですね。同時に、このAC21脱退問題も影を落としていると思うのですけれども、文学研究科として公的にこの木浦大学の日本語研修を受け入れるというチャンネルが、なくなりました。木浦大学が勝手に来るのをこっちは受け入れはするけれども、積極的にこちらの事業としてはもうやらないよというかたちで、和田研究科長のときから、研究科長が出て挨拶して、修了証を授与するというような公的な形もなくなってしまったわけです。そういうさまざまな事情があって、現在のように、この研修を木浦大学の独力で頑張っ続けて、われわれが最低限の支援をしながら受け入れするかたちになりました。

これについては、ご承知と承知はありますが、毎回親和会から補助を頂いて、大体2週間程度のスケジュールですが、学生間の交流について補助しています。この研修団の受け入れには、われわれだけではなく、ACEという名古屋大学の学生たちのサークルがあって、彼らが学生同士の交流という次元で非常に大きな役割を果たしてくれています。そういう学生間交流をサポートするために、親和会からの補助によって、歓送パーティーとか、そのほか研修の日程を動かしていく、特に人的交流を行うために必要な部分を賄わせていただいたという点も、何とか継続することができた大きな要因だったと思います。ただ全体として、少しずつ、かなり厳しい状況になってきたことは確かでした。

そういう中で、とにもかくにも20回を数えたわけですし、その20回にプラスアルファ1回は文学部のプロジェクト経費で私が一度提案させていただいたことがあって、90万ぐらいの予算でもってこの研修団を呼ぼうとしました。これも結局、行き違いがあって、毎年の研修団の派遣とは別の時期にわざわざ来るということになって、その年は2回行われたわけです。われわれのほうの主催の文学研究科のプロジェクトとしての研修団の受け入れと、木浦独自でのそれと、1年に2回やるということになって、回数を重ねたのは良かったのですけれども、こちらが期待していたかたちとは違って結構大変なことになりました。研修のメインである日本語講座は、木浦大学の負担で留学生センターで紹介してくれる講師を雇うかたちで、集中的に講座を設定して、それも留学生センターの李先生のご協力があって初めて成り立つものでありましたけれども、それでとにかく運営していた次第です。

しかし一方で、そういう状況の下でも、学術交流は結構いろいろなかたちのチャンネルがありました。われわれのほうからは、ほぼ毎年、木浦大学へ集中講義というかたちで教員が招へいされて行きました。ただ基本的には、私や高橋先生、坪井先生などの日本文学のジャンルに限られておりますけれども、木浦大学は、そのほかの分野でも、ぜひ来てほしいと希望しています。それから、学術交流として小さな研究集会、ミニシンポジウムみたいなものは結構随時行われて、町田研究科長が行ったときもそうでしたが、それ以外のときでも、たとえば池内先生をお願いして、木浦大学で、日韓のさまざまな学術交流を歴史と文学と両方で行うというようなかたちの催しがこの間に何回か開かれました。そういうことが契機になり、木浦大学からこちらに留学生、特に日本文学や比較人文学研究室に留学生が来て、もう既に5人の博士学位を出しております。それらのOBたちが、つまり、名古屋大学で学位を取った留学生たちが木浦へ帰り、韓国で活躍しておりますが、彼らがさまざまな次元の交流を支えてくれる非常に大きな力になってくれております。それ以外のいろいろなチャンネルで、木浦から名古屋大学に研修とか、短期の滞在を含めて、かなり往来があります。そういうことで、とにかく続いている木浦とのさまざまな次元での交流をどうやったら新しいステージへ展開させて、文学研究科における国際交流の一つの拠点というか、モデルケースになり得るものにできるかと模索していたわけです。

こちらの側のポジションとしては、今、ちょうど留学生委員長を務めさせていただいておりますが、高橋先生も留学生委員です。それで、高橋先生と私が留学生委員会にいて、留学生のいろいろな問題を共同して取り組むうちに、この木浦との国際交流も組み入れさせていただいて、そこで委員会にお諮りしつつ、いろいろサポートを頂くということを今までは続けてきました。来年以降、高橋先生は退職なさりますので、学術交流の側面は二人三脚でやってきたのが形が変わりますけれども、安井さんという有力なスタッフに来ていただいて、早速、今回は非常に活躍をしていただきました。こうした過渡期の状況も含めて、新しいステージにどういうふうに交流事業が展開できるのか、それを探っていた時に到来したのが、この文科省から提案されたプロジェクトだったのです。

文部科学省による SS/SV プログラムの通知 (留学生30万人計画の一環)

この文部科学省のプログラムは「留学生交流支援制度」という大きな枠組みの中に属します。つまり、有り体に言うと、この30万人計画をとにかく満たすために、あの手この手で考えた一つの提案がショートステイ、ショートビジットといえるでしょう。大体3カ月をめぐり、1カ月単位で海外の大学に短期留学、それも交流として相互に、こちらからも留学に行き留学生を受け入れる、両方を短期間でお試しというかたちで行くと、学生にひと月8万円の補助をするプログラムが提案されました。これなら使えるかと、この20年間にわたって続いた木浦大学の日本語日本文化研修をこのプログラムに乗せてみようと思立ちました。

それに当たって、ただ受け入れだけではもったいないと、今まで懸案になっていた名古屋大学から木浦大学への派遣、それも文学研究科として行うのであればぜひ大学院生中心で派遣ができないかと考えました。木浦大学にも大学院はあるのですが、あちらは、いわゆる名大のような研究中心の大学院ではありません。教育大学院というもので、レベルは全く違いますが、大学院生がいないわけではありません。加えて、今お話ししたようないろいろなレベルの交流がありますので、若手の留学経験者や研究者が木浦の周辺にはかなり居りますから、彼らと一緒に名古屋大学の院生が木浦で学び、やがて留学のきっかけになるような研修が実施できるであろうと考えたのです。そこで、双方向の交流、SSとSVを申請しました。

日韓大学生・大学院生学術文化交流研修プログラムの提案・応募の概要

当初は、結構大風呂敷な計画を立てまして、受け入れのほうは、木浦から20名、これは基本的に学部生です。それから名古屋大学から木浦大学へは10名、これは大学院生で、計30名の計画を立てて、それで申請しようと思いました。当初のペーパーではこのとおりだったのですが、採択まで時日がなかったので見切り発車で計画を大まかに作って、とにかく出していましたから、かなり井勘定でした。現実には20名の木浦からの派遣は可能かと問い合わせると、やはり例年のとおり15名にしてくれということでした。結果的には、例年どおりに15名になりました。こちらのほうでは、10名を確保する必要がありました。それ

もこの応募から間がない時期に10名の院生を木浦へ派遣する、しかも1カ月、夏休みはいつも院生にとっては稼ぎ時で、いろいろな意味で大事な時期ですが、ひと月、実際は3週間ですけれども、そんな長い期間行けるかということです。非常に困難のあることはすぐ分かりました。われわれの周りの院生に話しても、結構大変だという反応でした。行きたいけれども、こんな長期はなかなか大変だということはすぐ返ってきて、この10名はやはり非現実的だなと後で反省しました。しかし、書類は出てしまったんですが、採択された後でもぎりぎり変更は可能だということですし、もし採択された後でも、しかるべき正当な理由があれば返還は可能だということでしたので、とにかく実施してみようと始めました。

具体的にはどういうことをしたかと言いますと、パワーポイントに挙げたように、前にプロジェクト経費で文学研究科主催の研修を行ったときも同様ですが、建前としては、木浦大学生だけの研修ではなくて、木浦大学を幹事校として、韓国の学生を誰でも受け入れて、木浦大学はあくまで窓口ということで、実際に他の大学に声を掛けてもらっております。ただし、他大学の学生が何人かは打診があったのですが、やはり結果的には、参加は実現できませんでした。今回も基本的にはそういうかたちでやろうとしました。先方も準備から実施までの時日が少なかったこともあって、結果的にはすべて木浦大学生でしたけれども、建前として希望者が参加できるかたちで行っております。これからもそうした開かれた形でやりたいと思っています。

このように名大側のショートステイでは、学部生中心のプログラムを考えました。一方のショートビジットですが、これは、実は以前、90年代ですが、文学研究科の教員ではなくて、国際言語の教員が個人的にこの木浦大学との交流があって、随分貢献していただいたんですが、その方が個人的に名古屋大学の学生に声を掛けて、木浦大学に研修に行ったことがありました。ただ、これは非公式な研修旅行で、2年間で終わってしまい、それ以降は続いておりません。木浦大学への留学はもっと少なくて、学部生では1人だけ、それも法学部の学生でした。文学部では渡邊先生の研究室の考古学の院生が1人あった程度です。そういうことで、こちらからの派遣は少ないのです。各種の学術交流に関しては別としても、学生の相互交流という次元では、ショートステイのほうはその延長上で結構成り立って、今までの蓄積のスキームの延長上で発展さ

せれば何とか応用できるのですが、これまでほとんど経験していないショートビジットに関しては、後で経験者に一言話を頂こうと思いますけれども、やはり最低3週間という期間を木浦で学ぶ、そういうモチベーションなり、あるいはその魅力をこれから高めていくのは結構大変だということは、始めるところから感じたところでもありました。ただ、木浦大学としては、こういうプログラムをこちらが提案して受け入れることに関しては大変積極的で、幸い、その国際交流院の部長がわれわれの教え子である留学生で、名大出身者であるということにも支えられて、こういう新規事業に関して全面的に協力してもらい、独自のプログラムを作ってくれました。しかも、名大単独のプログラムだけだったら大変だったのですが、木浦大学校ではちょうど夏に国際研修プログラムという留学生のための短期プログラムが10日間ほど予定されておりまして、このプログラムに名古屋大学のショートビジットを組み合わせて受け入れようということになりました。その費用は全部向こう持ちです。だから、こちらの独自プログラムの分だけ費用を負担すればいいということで、大変ありがたい申し出でした。それぞれにそういう土台や前提があったので、急に下りてきた計画に乗っかって、ショートステイとショートビジットそれぞれを非常に短い期間で実現させなければいけなかったという事情に鑑みてみれば、スムーズにできたほうかと思っております。

申請したプログラムが採択されるかどうか、結構気をもんでいました。それが待ち切れず、先にそういう準備を走り出していたわけですが、6月下旬になってようやく採択されたので、公式な募集が開始されました。お配りした資料のうち最初に書いたポスターは、あまり目を留めていただけなかったので、来年はもっとみんなに見てもらえるような案内にして、いろいろなところへ流して、院生には基本的に全員に認識してもらえるようなアピールが必要だと思います。ともかく募集を開始してみると、他学部や学部生からも打診があって、関心を持っていた人は結構多いんですが、詳しい説明をすると、あるいはスケジュール等の都合で、最初は10人で計画しましたが、最終的な申請では削って8人にしたのです。それで満たせるかなと思ったんですが、結局、2人は駄目で、6人になりました。しかも、その6人のうち、一人は全日程参加できると最初は言っていたんですが、いろいろな都合でやはり駄目になって、一部の日程しか参加できない。となると、これは補助が出ないんですね。もう一

人は研究生でした。研究生にはやっぱり出せないということで、これは自主参加ということになって、それを後で本人にも承知してもらって参加してもらいました。だから、正味の参加者は6名だったんですが、実際に補助がもらえる学生は4人しかいないということになったのです。英語学、日本文学、そして比較文学の講座の大学院生が、それもドクターが多かったのも特記すべきかと思いますが、それぞれ研究者を目指している院生が、このショートビジットに参加することになりました。

プログラムの特色

SSとSVそれぞれの特色ですが、これは申請の書類にも強調したことですけれども、一方向だけではなく、双方向で行う相互交流型として、それもレベルの異なる研修の組み合わせです。木浦から名古屋のSSのほうは学部中心の従来型の研修の延長で、日本語研修を含むのですが、これは日本語研修をメインにしては困るという条件があり、多角的な研修として、日本語、日本文化の総合的な研修を学部生レベルで行うことにしました。さまざまな経験をしてもらって、将来、特に大学院での留学を目指す学生がこの名古屋大学へ留学しようとする動機付けをしてもらおうということが大きな目標です。

SVのほうは、名古屋大学が研究大学院として諸人文学分野の研究を目指す所属院生が、韓国へ行くことで、そこでまたさまざまな研究者、あるいは大学院生や若手研究者と研究交流を行い、併せて韓国のさまざまな文化や学術の動向を学ぶことによって、自分の研究を韓国という場から見直して、新たに国際的に飛躍するきっかけにしてもらうというねらいです。この他にもいろいろな目標をここで見つけられるだろうと期待しています。実際に院生が行ってみれば、こちらが予想している以上に良い経験を得てくれるであろうと思います。

もう一つは、それぞれの学校の教員がその研修に同行したり、あるいは参加したりすることによって、これまでも続いてきたような両校の学術交流の実質を担保するねらいです。さらに発展させるために、このSS、SVの期間、相互に教員を派遣し合うことによって効果を高めようという期待です。これは今まで木浦大学の研修が毎年派遣される機会に教員と一緒に来て、それからわれわれのほうからも随時いろいろな機会に向こうへ行つてシンポジウムとか研究集会を営ん

できたことを、院生教育の一環としてむしろ実質化、恒例化しようという狙いがあるわけです。

そういう相乗効果を狙ってこのプログラムを提案したわけですが、その中で幾つか重要な点は、特に強調したいことは、SVのほうでは、留学生も参加が可能なのですね。当然のことながら韓国人の留学生が行っても意味はありませんけれども、中国の留学生が2人参加してくれました。これは非常にいいことで、名古屋大学に留学している学生がこのチャンスに海外の研修に参加して、別の国の大学の研修を通して、さらに多角的ないろいろなことが学べるよい機会になりました。これはこのプログラムの利点だと思いますが、実際にそれが実現できたということです。

SSのほうでは、今までの延長というか、ただ踏襲しただけではあまり意味がないと思いましたが、この機会に新しい試みを企てました。しかも、せっかく3週間もあるわけですので、これは学部中心ですけれども、文学部の新しいカリキュラムをこのために設定して、その研修に参加した学生たちは、そのカリキュラムで2コマの単位が取れる、日本文化入門と名付けた講座を履修してもらいます。またそのことが強いモチベーションになって、この3週間という研修の長丁場を彼らが乗り切る原動力になることを期待しました。これについては、私どもだけではとても実現できないので、カリキュラムとしてのシラバス等の企画は私が考えさせていただきましたが、その実現に当たっては、関連の各研究室の先生方をお願いして、この15コマを共同して務めました。教員だけではこの忙しい時期に全部が賄えないので、一部は臨時のティーチングアシスタントとして大学院生に手伝って貰いました。この日本文化入門の大きな枠組みを比較文化、つまり、比較人文学の学部にと落としているそのカリキュラムの枠に設定して、そのティーチングアシスタントを使えるということでお手伝いを頂いて、15時間の内実を充実したものにしました。端的に言えば、研修を単位化したということです。彼らは、このSSのプログラムに参加することを通して、名古屋大学の文学部から2単位持って帰るというおみやげも派生しました。だから、単に「修了しました」といって、修了証という形だけの紙切れを貰うのではなくて、実質2単位を持って帰って、それを木浦大学の単位に読み替えることができることになった次第です。立ち上げは急ごしらえでしたけれども、やはり教務課の全面的なご協力を頂いて、その実現に漕ぎ着けることができました。

プログラムの実施：SS（名古屋大学）

いよいよ実施です。ショートステイの研修生は、7月の30日に木浦から名古屋へ参りまして、8月19日までの21日間、3週間滞在にしました。そのプログラムの中身はどんなものか、資料に細かい日程表が付いていますので、それをご覧ください。そこに、日本文化入門の講座にどの先生方がお力添えいただいたかということも書いております。教室での講座以外に、これは従来行っていたものですが、教室外での見学実習、あるいは研修旅行を、ショートステイプログラムの一環として実施しました。それはこの日本文化入門の講座のカリキュラムとして実地見学、フィールドワークとして組み合わせで作ったものです。こちらのほうは、名古屋大学の文学研究科からその実施費用を頂いております。このプログラムの見学旅行の研修の中身は、この文学研究科プロジェクト経費としてあらかじめ予算化したバス代として支出していただいております。これは1泊2日、あるいは2泊3日でそれぞれ週末に行ったのですが、一つは、われわれ比較人文学が、今、佐々木先生と一緒に取り組んでいる花祭りの伝承されている地域へ参りました。花祭りはオフシーズンですが、奥三河の山間地域という、普段は絶対観光には行かない場所、名古屋とは対照的な、同じ愛知県ながら山中の過疎地で、いろいろな問題を抱えている地域、しかし、花祭りをはじめとして、豊かな文化と歴史を伝えている土地に、この研修学生たちが行きました。そこでその土地の人たちと会って話を聞き、いろいろな問題を認識し、同時にその土地が実は非常に豊かな資源がある、そういう世界を実感してもらったのです。これには、花祭りプロジェクトにかかわっている比較人文学の院生にアシスタント兼ガイドとして一緒に随行してもらっております。あるいは熱田神宮とか博物館とか徳川美術館とか代表的な歴史文化の遺産を見学しました。徳川はいつも高橋先生がご案内くださっているのですが、そういう得意分野を案内してもらおうということも含めて、大変多角的なプログラムを実施しました。最後に、私が京都、奈良を案内して、これは定番の有名な世界遺産の社寺仏閣の見学です。できるだけ多くのところをみんなに経験して貰うということで、かなりバラエティーに富んだプログラムを提供しました。一方、日本文化入門の講座の諸先生方にはそれぞれの専門の入門的な講座をしていただいております、それが大変効果的に働いたのではないかと思います。

一方、その実施に当たっては、同じ期間の日本語講座で、日本語の入門的なトレーニングもしているわけですが、それだけでは未熟な学生にはそのプログラムの理解にとても足りないので、必ず各時間ごとに、研修旅行でも一緒に随行してもらるように、名古屋大学に在学している木浦大学の留学生がマスターとドクターにそれぞれおりますので、彼女たちにただ通訳をしてもらうだけではなく、それぞれのプログラムの準備や実施に当たってのいろいろな連絡その他を含めて、大変な貢献をしていただきました。特にティーチングアシスタントに任命して、その費用を出さなければいけないくらいの大活躍でした。彼らは自分たちの母校の後輩たちのことでもあるということで、本当に献身的に頑張ってくれたのです。今までの研修の積み重ねがあったからこそ、この3週間の長期間でもそのようなプログラムが実現できたわけですけれども、その時の彼らの存在がやはり非常に大きな力になったということを特に申し添えておきたいと思っております。

そんなわけで、このショートステイの3週間にわたる大変長いプログラムを、とにかく実現することができたのですが、これも、実はいろいろな困難が伴いました。従来の10日前後の期間であれば、当然、一定程度は学生に個人負担は強いのですが、木浦でも大学の補助が結構出て、それで何とか行うことができたのですが、これだけの規模になるとさすがにそうもいきません。一番大変なのが、実は宿舎の問題でした。この時期の名古屋大学の宿舎は、実はほとんど空きがありません。取り合いです。特に集中講義などが入っている7月下旬から8月上旬にかけては、ほとんど取れません。お盆のときがようやく空いているくらいで、総務掛長に随分頑張ってもらったんですが、結局、この3週間の間に名古屋大学で取れた宿舎は3分の1もない5日間です。あとはどうしたかといえますと、前半のほうは、実は私どもの個人的な関係で、名古屋天理大教会という天理教の大教会があります。ここの元教会長がこの比較人文学の社会人院生で、嶋田先生のところで学位を取られました。私もそのお手伝いをしましたけれども、大変な苦勞をして学ばれた方です。最高齢で学位を得られました。この方に今までもずっといろいろなサポートをしていただいております。瀬戸線の大森の金城学院の近くに天理大教会の名古屋大教会があります。この方のご厚意で、その教会を宿舎としてちょうど1週間提供していただくということで、研究科長から依頼状を書いていただいて、それで正式にお願いして、受け入れていただくことで

しのぎました。ちょうどその直前には、この教会で名古屋場所の大相撲の部屋の一つに宿舎を提供しており、お相撲さんがおられました。そこに韓国の木浦の学生が入れ替わりに入るということで、ちょうどその初日のときは力士とも一緒に食卓を囲んだそうで、よい経験になりました。そうしたご厚意に預かったことが何とか3週間という長い研修期間を実現できる一つの大きな力になりました。後半のほうは、ホテルのルブラ王山を取って、そこで泊まるというかたちでのいざ次第です。

また後でそういう課題はいろいろ申し上げることになると思うのですが、これから、もしこういう長い期間の研修を行うというならば、留意しておかなければいけない教訓がさまざまにありました。そういうことで、このショートステイのほうは、従来の長年続きました研修団の受け入れを土台にして、それをいわば発展させる、そこに幾つか新しい機軸を付け加えることによって、充実したものにしようと試み、さまざまな困難はありましたけれども、多くの方々のご助力と、何と云っても金銭的にも文学研究科の公的なサポートがあり、それから親和会からもいつもながら援助をいただきました。親和会は、もうなくなってしまったのですが、それまでの積み重ねが今まで生きて、何とか実現がすることができました。

それでは、これから後、新しく研修に合わせて始めたショートビジットについて、つまり名古屋大学から木浦大学へ研修に行ったSVの3週間ですね。これについては、安井さんにバトンタッチをします。安井さんは院生に同行していただいております。今までの研修でもそうですが、本来は、全日程は無理としても、最初からある程度の日程で名大の教員も1人同行すべきでしょう。木浦の方からは必ず教員が1人同行して来て、今回も全日程来ていただいて、一緒に過ごしていただきました。むしろ名大から教員を派遣するのが本当に困難で、それがなかなかできなかったわけですが、後半のほうで安井さんに自分の研究費を使って同行していただきました。その実際の経験も含めて、安井さんからご報告をお願いしたいと思います。

プログラムの実施：SV（木浦大学）

安井：私は、最後の1週間だけですけれども、同行させていただいたので、ショートビジットのほうを説明させていただきます。これは同じように21日間だったんですけれども、主要行事は、先ほど阿部先生か

らもご説明があった木浦大学国際研修プログラムへの参加です。これは木浦大学が独自で用意しているプログラムで、費用もあちら持ちですけれども、名古屋大学の学生用というわけではなくて、ほかの国からも参加者があって、総勢30~40人ぐらいの国際色豊かなプログラムだったようです。そして、それでは、韓国語講座だったり、文化交流のような講座で、民族衣装を着るような体験があったり、研修旅行のようなものも組み込まれていました。それだけではなくて、こちらの独自のプログラムとして、研修生の皆さんに自由に研修旅行というかたちで計画してもらおうという部分と研究集会を組み込みました。そして、このプログラムが終わった後に、そのまま全員でソウルに移動して、3日ほど滞在したんですけれども、そこでは博物館見学ですね、博物館や王宮の見学というの組み入れました。提携校の梨花女子大の訪問も計画してはいたんですけれども、夏休みということで完全に閉まっています、ちょっとそこのところがうまくいかなかったので、今度からはもう少し事前にアポイントメントが取れるようにしたいと思っています。

ほかに写真を見ていただくと、こういうかたちで、研修生たちは本当にいろいろな経験をしたようで、博物館見学だったり、たこを作ったり、これは修了式の

ときの写真です。こういう感じで楽器も使っているんですね。非常に充実したプログラムだったようで、木浦を去るときに涙ぐんでいる研修生もいるぐらいだったので、ああ、本当にすごく楽しい時間だったんだなというのを感じました。

次は、成果について説明します。



プログラムの成果：SS（名古屋大学）

阿部：今、ちょうど綴じたものをお渡ししておりますけれども、木浦大学からの研修生は、さっきお話ししたように、日本文化入門という講座を履修してもらおうということで、その講座履修の成果発表会といたしますか、最後のプログラムとして、ただ習うだけではなくて、この研修全体、あるいは日本文化入門のこの講座を通して何を学んで、自分でまたそれを受け止めて



考えたか、それをレポートにまとめてもらいました。最終的にはレポートとして提出してもらうんですが、その前に、この研修プログラムの最後に成果発表会を設けまして、私と引率の先生とが司会というかたちで、みんなにそれぞれ口頭でその成果をスピーチしてもらいます。それが将来、これから書くレポートの基になるようなプレゼンにしてもらうと要求しました。ただ感想ではなくて、そういう目的意識をはっきり持った発表をしてもらうということで企画いたしました。それを基にして、みんながこれからこの入門のレポートとしてどんなテーマに取り組みたいかということを教えていただいたわけですね。それでその後、帰ってから2週間以内を期限にしてレポートを作成してもらい、それを送っていただきました。今お配りしている冊子がそういうレポートのペーパーで、これはそのまま文科省のほうへ提出したプログラムの報告書の中身になっているわけですが、各研修学生が日本文化入門や研修旅行その他でいろいろな経験をしたことや習ったことがどういうふうに生かされたかということが、表紙から始めていろいろ工夫をして、示されております。

これで見ると、このプログラムは見事に効果が上がったなと思いますのは、実にバラエティーに富んでいるんですね。一人一人、同じテーマがないんです。全員がこの3週間の研修プログラムでこちらが設定した、日本文化入門の各先生方による講座、研修旅行でのいろいろな体験、経験、それから見学から触発されて自分の研究テーマを見いだしました。例えば、日本の住宅建築について調べてみよう、それが韓国の住宅とどう違うのかという比較文化的なアプローチとか、ここで経験したり習ったことが自分の主体的なテーマとして見事に生かされています。それから各先生方が講座でレクチャーしたことがちゃんと受け止められて、それが自分の研究、これから勉強したいということの大きなモチベーションになっている、そんなレポートがもう既に成果発表会のときでもはっきり窺われました。さらにレポートになってみると、日本語のレベルはさまざまですが、実はかなり主体的な、この研修成果がちゃんと上がったものになっていたのでないかと思っております。私はちゃんと評価を致しました。可はありません。みんな、良以上で、特優が2人もおりました。もちろん、優が一番多かったのです。結構厳しく付けたのですが、木浦のほうにはそういういい成績を送ることができたということ、もちろん全員履修したと報告することができました。

プログラムの成果：SV（木浦大学）

安井：ショートビジットの成果、こちらから木浦大学に派遣した側の成果ですけれども、8月16日の研究集会で発表を行いました。その日だけは研修生は先ほども申し上げた木浦大学独自のプログラムからは外れてもらって、こちらからは4名の教員、阿部先生、池内先生、高橋先生と私が参加しました。お手元の資料にそのプログラムがあります。それで、向こうの日本語日本文学の研究科の教員と学生にも発表していただいて。

阿部：歴史の先生もいましたね。

安井：歴史もですね。はい。ディスカッサントとしても参加していただき、日韓の研究交流というかたちで行いました。これは、必ずしも同じ専門の学生が集まっている場ではないんですけれども、やはりそういう専門外の研究発表があつて、専門外の視点からの質問とか議論も繰り広げられたのは、非常に有益だったと思っています。学生も、必ずしも韓国の文化だったり歴史だったりを研究している学生たちばかりではないんですけれども、向こうで韓国語に触れたり、韓国にある歴史的資料に触れたりすることで知的好奇心も刺激されたようですし、先ほど先生がおっしゃったように、やっぱり向こうでまた別の、日本といういつもいる場所とは違う場所で研究交流をする、学術的な交流をするというところで、また新たに視野が広がるような経験があつたと思います。それで今、回覧資料としてお配りしているこの報告集ですね。論文集ですけども、これは取りまとめて刊行する予定にしています。これはまだ予算の問題などもあるんですが、何か形にして、木浦側にも送れるようにしたいと思っています。

今後の展望・課題

最後に今後の展望と課題です。今回、本当に阿部先生にすべて最初の計画からしていただいて、土台を作っていたので、文科省からは来年度の募集も来ていますし、来年度もぜひ応募したいと思っていますし、その後も続けていきたいと思っています。大きなことを言うと、文学研究科の特色の一つになるぐらい確立したプログラムにしたいと思っていますので、留学生委員会だけのものではなくて、研究科全体で連携して進められるような、何か確立したものを作りたいと思っています。今回も先生方に講師としてい

ろいろとご協力いただいたので、今後お願いしていくことになるかと思います。今回は、6月下旬に採択されてからの募集ということになったので、集まった学生数が非常に少なかったということがありますので、今度からは、先ほど阿部先生のお話にもありましたけれども、研修生を増やすための工夫をしていきたいと思っています。

それで、最大の課題となりますのが、財源の確保ですね。今回は、先ほどの阿部先生のお話にもありましたように、途中参加の学生や研究生には文科省からの8万円の補助が出ないということでしたので、やはりそういった全日程参加が可能ではないような学生や研究生には参加が難しい状態でしたので、今度からは、何か外部の資金を獲得するなり、あと考えているのは、全学留学生支援事業経費というのがありますので、留学生が参加するということが条件であれば、おそらく申請が可能ではないかと考えていますので、そ

ういったところから財源を確保していきたいと思っています。今回、プロジェクト経費からもバス代などを援助いただいたんですけども、これもいつかはなくなってしまう経費ですので、やはり外部資金というか、ほかのところで獲得していく必要があると感じています。

今回初めて私も参加させていただいて感じたのですが、名古屋大学のOB、この研究科の卒業生が木浦大学で活躍されていて、そして今回、私たちに非常に良くしてくださって、プログラムもすべていろいろなところでサポートしてくださったりといった、木浦側の大きな協力がありました。総長にもすごく良くしていただいたのは、今までの長い木浦大学との交流の歴史があつてこそだと思いますので、やはりこれは続けていかなければならない、続けていきたいと思っている次第です。今後ともよろしく願いいたします。

司会：どうもありがとうございました。木浦大学のこの交流の計画から始まって、今回のプログラムを具体的に詳しくお話いただきまして、大変盛りだくさんの成果を上げられたということがよく分かりました。参加された方が実際におられます。

阿部：そうですね。

安井：英語学の宋さんです。

阿部：では、宋さん、もしよかったら、一言。実際に参加した研修学生のそういう声をここでみんなが聞けるのはすごくいいことだと思いますので。

宋：すみません。ほかの参加者も来ると思って、(一同笑) 来ましたが、英語学、D3の宋と申します。さっき、皆さんがご覧になった2名の中国人の留学生の中の1人です。今回のショートプログラムに参加して、すごく有意義な21日間を過ごして、まず先生の方々に感謝を申し上げたいと思います。あと、本当に木浦大学で濃縮した留学の感じを体験しました。たくさん美術館を見て、あとたくさん体験をして、例えば、空で飛ぶたこまで作らせてもらい、伝統的な楽器、琴とか、本当に普段やらないことを何でもやりました。あと、こちらの学部生、日語日文学科の学部生との交流もできて、とても有意義な交流になりました。あと、韓国の仏教の精神をちょっと勉強して、大変楽しくて勉強になった3週間で、ありがとうございました。

阿部：研究集会では、宋さんがご自分の研究テーマ

の生成文法の問題をそこで紹介されて、成果でもそれがまとめられていますけれども、そういう自分の専門の研究を海外でアピールされたわけですね。

司会：21日間というのは、最初から決まっているんですか。

阿部：これが最低です。8万円もらえるのは、(21日間が)最低です(笑)。この期間をどうしてもクリアしなければいけないのです。もう一つは、これが行き帰りの期間を含まないとなったら困ったなと思ったんですが、ぎりぎりその行き帰りを含んでいいということでしたので、こちらは来るのに1日、帰るのに1日ですから、それは一応21日の中に入れるということでやったわけです。それで宿泊の日数をできるだけ少なくしたわけです。

司会：途中参加がいいなら、したいという人は。

阿部：多かったですね。はい。

司会：でも、それだとお金が出ないですから。

Q：3週間では、なかなか厳しいです。

司会：厳しいですね。

安井：確かにそうですね。

Q：お伺いしていて、阿部先生、安井先生をはじめ、関係された先生方のご苦勞を(笑)垣間見ることができて、今日は大変有意義だったと思います。本当に短い期間の中で準備されて、少しずつ伺ってはいましたけれども、本当にこんなに充実したプログラムを用意されたわけで、それももちろん先生方のご尽力もあつ

たでしょうし、これまでの蓄積というか、そういうものもたぶんあったのではないかと思います。今、全学的には、この前も委員会報告で少し話しましたが、戦略的な国際交流ということで、世界ランキングをにらんで、近そうなところと積極的に交流を進めるということをしているんですが、それが悪いとは言いませんけれども、やっぱりこういう現場の熱意に支えられて続けてきたものを大学としてもっときちんと評価してほしいなと強く思います。

阿部：AC21の脱退問題というのは、われわれにとっては本当に衝撃というか、痛恨事だったんですけども、やはり木浦としては、どうもついていけなかったらしいんですね。しかも、名古屋大学の側としては、韓国でそういうAC21のグループとしてやるのだったら、もっとランクの上の大学で、それもソウルにあるメジャーなところと、という思惑があって、そういう思惑とのすれ違いがそういう事態に至ってしまったということでしょう。だから、もちろん僕も大学上層部の希望は分かるんですけども、やっぱり今先生がおっしゃったように、そういう積み上げてきた交流を大切にすること、それが礎となってこそ真の発展があるのだと思います。さっき安井さんもおっしゃっていましたが、僕は、今度のプログラムで、実は期待していたというか、これは次回以降、ぜひ実現したいのは、木浦だけではなくて、他との交流、ぜひこの機会に協定校と相互に横の交流を行いたいです。そこで交流協定のある梨花女子大を狙っていたんですけども、うまくいきませんでした。ほかでももちろん構わないので、また木浦のほうから紹介してもらえると嬉しいですから、そういったかたちで、この研修を通して多角的な交流を実現したい。教員も一緒に行きますから学術交流のきっかけになります。日本文化学のほうでは、例えば、東国大学とか、幾つかの大学との交流をやっていますが、それぞれがやっぱりバラバラで、横でつながっていないんですね。それをこういう機会につなげることができたらということも、希望としては持っています。

Q：あともう一つだけ、きちんと理解できていなかったことがあるんですが、ショートビジットのほうで、学部生ではなくて、大学院生というのは、どういう経緯ですか。

阿部：これはもう僕の独断（笑）というか、最初からのコンセプトで、こうしようということでしたので、つまり、名古屋大学というより、文学研究科としてこのプログラムを実施するのであれば、文学研究科

としては院生中心の、そして研究や学術交流につながるようなショートビジットにしたいというふうに、最初から決めていましたので。ただ、これは学部生も拒むものではないという方針で行ったんですね。実際、学部生からも打診があって、実現はしませんでしたけれども、むしろ、学部生にそういうところにも加わってもらって、研究集會も含めて経験してもらうのは本当にいい経験だし、できれば、文学部の学部生が参加して欲しいですね。

Q：できれば、早い段階でこういうものに参加して、ここから関心を膨らませて、大学院に進学してというプロセスがあったほうがいいかなと思いますけれども。

安井：そうですね。これはきっかけになるというか、海外に出ていくきっかけになるかもしれないですけども、研究というものに興味を持っていただければ、その後につながりますね。

阿部：次回以降、大学院生だけと受けとられるのではなくて、ぜひ学部生も参加してもらえるかたちで企画を考えたいです。

Q：同じことの繰り返しになるんですけども、木浦では、ここのOBに随分お世話になりました。これは本当に懐かしかったのは懐かしかったし、とてもいろいろなところで、学術交流集會のときのコーディネーションとかもやってもらいましたし、研究発表ももちろんやっていましたし、ものすごく力になったなと思いました。ですから、ここで留学生をしていた子が、今、向こうで副教授をやっているというのは、最初、本当にびっくりしました。だから、すごいポジションに就いているんだなと思って、とてもうれしかったです。それから向こうから来た韓国人の留学生については、今ここに留学してきている留学生が全部サポートしてくれて、これもとてもよくやってくれているなと思いました。それで3週間というのは、大学院生が3週間まとめて行くというのはなかなか難しいし、学生も3週間は難しかったみたいで、日本史の研究室で何人か声を掛けて、その気になったのが3人ぐらいいたんですけども、1人は集中講義が引掛かるといので、1人は、これだけに3週間拘束されるのはちょっと困るなという。

阿部：そうですね。

Q：もうちょっと自由時間をくれるんだったらいいんだけどな。

阿部：参加希望者もそう言っていましたね。

Q：この制度を使つては、1回目ということなので、

ショートビジットの場合は、木浦のプログラムに全体的に乗ったんですね。ですから、この内容を見ていても、外国人向けの、外国人に韓国文化をどういうふうに伝えるかというプログラムになっています。ですから、韓国文化に初めて触れる外国人にとってはすごく面白いんですね。だから、僕らのほうでもこれともう1ランクアップするようなプログラムを少し準備しながら、先方と相談してできるといいかなというふうには思うんです。これは日韓だから、どうしても向こうへ行く場合には、韓国語とか韓国文化ということになってしまうんですけれども、もう少し工夫できると、もっと学生が集まるなという。いいのか、悪いのか、分からないけれども、つまり、コリアンイングリッシュを学びに行くとか、あそこは大学院レベルの英語に随分力を入れていきますから。ですから、そういうレベルでの交流をさせるのであれば、ひょっとすると、日本人で英語をそれなりに勉強していて、向こうでコリアンイングリッシュで相互に交流をしていくというのもあり得るのかなと思ったりもしました。

阿部：私は、いつも留学生や向こうの先生方も全部日本語で対応してくださるので、そういう必要性をあまり感じないで済ませてしまうんですけれども、実際には、学生なり、それから他の分野の研究者は、コミュニケーションを取る場合には、やっぱり韓国語ができない人が多いです。池内先生のような方は例外的ですから、そうなると、英語で多角的な会話をするようになるということで、これは海外のどこの学会へ行ってもみんなそうですけれども、むしろ、この研修がまたそういう経験をできるその一環になれば。だから、今度の場合には、日本語と韓国語、基本的には日本語でも全部理解できるようにしましたけれども、本当は研究集会も、そのうち、それこそ英語でやるとか、他の外国語を組み合わせると、こちらは中国からすごく留学生がたくさん来ていて、いわゆる中国語だけではなくて、中国文学を含めた中国学はかなり大きい位置を占めていますから、実は、そういう面でも学ぶことができるのではないかと思います。

司会：私のところの学生も、中国人の留学生はこれに非常に興味を持って、直前まで行きたいと言っていた人がいるんですけれども、ちょっと期間が長過ぎるということで駄目でしたけど。やっぱりかわりが深いですから。

安井：はい、そうですね。

司会：あれも、途中参加の人向けの援助とか、そういう（笑）ことでも、財源は難しいですね。

Q：でも、やっぱり、やるからには、プログラムをちゃんと全部してほしいというふうに。

司会：それはそうですけどね。

安井：そうですね。

司会：今年の6月に採択が決まって、来年からはもっと早くなるんですか。

安井：いや、これはどうでしょうね。また、おそらく同じではないかなと思うんですが、一度通っているということは、来年も通るのではないかなという予想は付きやすいような気はします。

司会：でも、年度ごとなんですね。これは単年度。

安井：はい。

Q：たぶん採択の時期はなかなかそれ以上早くはならないので、考えられる方法としては、もう採択されることを見越して。

阿部：そういうことですね。準備は。

Q：「採択されたら実施します」という条件付きで、もう少し早く。

阿部：プログラムなり、その中身については、それこそ、いくらでも工夫の余地はありますし、木浦大学の場合も、先方から全学として設定されているこういう国際研修プログラムに乗っかるかたちで、われわれのほうの都合と合わせて、それがわれわれのほうの独自プログラムが前になってしまっただけで、後のほうで合流するというかたちになってしまったんですが、これはその実施時期をずらせば、このコアのプログラムをずらして、それでこちらの独自の部分をもうちょっと柔軟に作るということは可能だと思います。また木浦大学の担当者と十分いろいろディスカッションして、いいものにして、意欲的なプログラムとして参加者を増やし、いろいろな各研究室の留学生も含む院生のニーズに合わせたものにしていくことは可能だと思います。ただ、最低21日間参加しなければ費用が出ないというルールはたぶん変わらないと思いますし、その8万円というのが、今、韓国では、すごいウォン安なので、すぐ消えてしまったらしいですね。しかも、その時期は航空運賃が高いので、安いチケットが手に入らなくて、それで半分以上、6万ぐらいチケット代で消えてしまったと思います。そういうことで、せっかくもらった8万円でも、彼らにはあまり使い手がなかったです。逆に、木浦のほうは、結構使い手があったみたいですが。

安井：向こうのプログラムに乗っからないような形になると、自由は利きますけれども、またさらにお金が掛かってくる可能性もありますよね。今だと、向こ

うのプログラムはやはり文化交流みたいなかたちなので、学術交流が必ずしも目的じゃないというところで、研究集会だけは少し別の感じで行われていて、確か、参加者の学生さんたちもそれだけの用意を文化交流のプログラムとは別で用意しないといけなかったんですね。そこが全部一緒になったような学術交流がもう少しできればいいですね。お金のことはありますけれども。課題はありますね。

阿部：あと、何度も申し上げていますが、親和会から毎年援助を頂いて、それでパーティーやお弁当代、それからボランティアの学生たちとの交流会のそういう費用もそこから出させていただいているということで、これが今までこういう研修団の受け入れが続いてきた、一つの重要な基盤です。それがこれからなくなってしまいます。今はまだ残金があるけれど、それはいずれ使い切ってしまうわけですし、そうなった場合、どうなのかという。出せる財布はないんですね。公的には全くないということで、それこそ、もらった8万円の上前をはねて、実は、ご承知だと思いますが、あの8万円は学生に直接渡されるんですね。どちらのケースでもそうです。ということで、現金が出ますということで、一度学生に渡ってしまえば、あとはそれをどう使おうと自由です。だから、そこで学生にあらかじめ言って、「この分はこういうことでみんなからもらうよ」ということでもらって、それを使うというしかないという(笑)、そんな工夫も考えなくてはならないですね。実際、やりくりはどんなことでも大変だと思いますが、これが将来的に考えていかなくはないいろいろな次元でのこともあります。でも、やっぱり基本的には時間もそうですし、それからどうしても身銭を切るということを覚悟する必要があるということです。ただ、ありがたいことに、今回、安井さん、それからほかにもいろいろご協力していただく方、皆さんがあってできましたし、僕もこれはいつまでも続けていられると思わないので、やがて木浦とのコーディネーターというか、交流の役割は、若手にバトンタッチをしていこうと考えています。まだここではお名前は挙げませんが、そういうことをお願いするというふうに相談している方もおりますし、いずれ、来年度以降、このプログラムの実施に当たっては、ご参加いただけたらと思いますということで、徐々に世代交代を図っていきたくと思います。

司会：ほかに何か。

Q：よろしいですか。すみません。この会の趣旨に

ふさわしい発言だとは私も思わないですけども、まずはおおびしなければいけなくて、阿部先生はじめ、ご苦労されていることは承知してはいたんですが、どれだけのご苦労をされているのかというのは、初めて伺って分かったような次第でありまして、それは本当におおび申し上げます。具体的に、あちらから学生さんが来られていることも承知してはいたんですが、どういうスケジュールで行われているのかという部分も具体的には今日初めて拝見する次第で、本当に申し訳ないと思っています。それからいろいろお役に立てることがあればと思っはいたんですけども、例えば、ホームステイとかの協力に関しては、うちはいろいろ事情があってできませんので、なかなかお手伝いできないでいたんですけども、今回のことであれば、今日初めて京都、奈良方面にいらしたということを知ったんですけども、もし仮に平城京とかへ行かれるということが日程の中に入るのであれば、ご案内するようなこともお手伝いは可能かなと思いますので、それも、日程的な問題で確約はできませんけれども、日程さえ合えば、ぜひお役に立ちたいと思っていますので、もし仮にそういうプログラムがあるのであれば。

阿部：はい。前回は、実は文学部のプログラムのときに平城宮へ行きまして、大極殿へ見学に行ったんですが、それは冬で、吹きさらしの中を行ったので、みんな、凍えてしまいました(笑)。でも、あれは忘れられなかった体験ですね。

Q：外国人をご案内したこともございます。向こうへ勤めていたころ、そういうこともございましたので、ただ日本語で。

阿部：はい。そのときにはよろしく願います。

Q：そういうことがあれば、どうぞ、お声掛けください。

司会：ほかに、どうでしょうか。特にないようでしたら、もう1時間半過ぎましたので、よろしいでしょうか。

Q：皆さんで大変なご苦労をして来られていたのを、同じように、薄々は知っていたんですけども、実際には何も知らなかったもので、その驚きと、申し訳ない気持ちと、それからまたこんなにしなければならぬものかなということをやっと思いました。それで、参加してくれる学生の人数がそろわないということで、それが一番残念なことかなと思います。学生の数が増えて、やりがいもあるし、そのためには何が大切なのかということをやいろいろ考えていらっしやるんでしょうけれども、6月に予算が決まって、それからま

とめなければいけないその制度自体にやっぱり一番大きな問題があるのではないかと思うんです。また、21日間行かないともらえないという。そうすると、なぜ21日というのが最初から付いてきているのかなという気もするんですけどね。

阿部：それは最低限ということですよ。本来は、建前と言えば、1カ月以上、できれば3カ月ぐらい行ってもらいたいというのがいいと思います。ただ、どこへ行っても8万円です。地域は関係ないです。だから、遠くへ行けば行くほど大変になるので、もうヨーロッパへ行ったら、それこそ随分自前で出さないと、とても8万円では行けないと思いますし。だから、その意味では、韓国が一番安上がりだと思います。

Q：語学学校によその国に語学だけを学びに行く研修だと、1週間でも長いほうがグレードが高いわけです。そのほうがインテンシブに勉強ができるかなというので、おそらく人気が出るだろうと思うので、単純に語学研修というかたちであれば、21日以上、長いほうが良いというような理屈は分かるんですけども。

阿部：われわれももうちょっとコンパクトなほうが本当にやりやすいです。とにかく宿泊だけでも四苦八苦しています（笑）。もうちょっと簡便に、そういうケースで、短期といっても、ある程度の期間宿泊できて、別に個室でなくていいわけですから、ある種、大部屋みたいなところでも構わないわけですし、欧米とか世界的にそうですけれども、夏のお休みのときは、どこでも学生寮が開放されますよね。そこは格安で滞在できます。どうして日本の大学はそういうところがあまりないのかなという思いはあるんですけどね。

Q：宿舎に関しては、今は少し作っていますので。

阿部：この間、ちょっとまたできましたよね。

Q：もしかしたら、来年以降は多少余裕が出てくる可能性はあります。あと、このプログラム自体は、文科省の意図としては、一応、正規の課程に参加させたいということですよ。

司会：幾つかコメントが。

Q：ええ。幾つか。今、ちょっと具体的にはないですけれども。

阿部：全体として、つまり、名古屋大学全体としてまとめて出すケースがありました。われわれも最初はそちらで一緒に出してもらおうと思っていたら、むしろ、本部のほうでは「単独で出したほうがいいですよ」ということで、単独申請になったんですけども、そういうふうに複数の学部で幾つかまとめて出したところもあるんですね。だから、僕も全体は分からないんですけども、結構多いです。ただ、文系では少ないです。

Q：そうですね。結局、留学生センターのほうで幾つか出てきたのをまとめて出したというケースもあるんですけども、理系で、向こうのプログラムを一部もらって、だから、一定の期間行かないと、それこそ行った意味がないというプログラムで。

司会：ぜひ、来年度以降も（笑）。

安井：はい。

司会：よろしいでしょうか。では、今日はこれで。どうもありがとうございました。

安井：ありがとうございました。（拍手）

阿部：報告書の刊行費が、今のところ、まだめどが立っていないので、もしまた何かあれば、ぜひ、よろしくお願いいたします。どうもありがとうございました。